

北 どりくろあ

第110号 2025年5月1日（毎月1日発行）



駅舎には雲南市観光協会が入っていて、レンタサイクルも利用できる



「日本さくら名所100選」認定の斐伊川堤防桜並木

きすき 木次線ストロール⑬

きすき 木次駅

「中国地方随一の桜並木と同期の桜との再会」

出かけたのは、4月7日の月曜日。快晴で花見には最高の日だが、果たしてまだ桜は咲いているだろうか。8時半過ぎに庄原の自宅を車で出発。わざわざ寄り道して、地元の桜の名所である上野池の桜並木の下を通ったが、七割方花は散っている。やはり、ちよつと遅かったか。

目的地の木次線日登駅を、スマホのナビで検索すると、尾道―松江道のルートが表示される。そこらの方が距離的にも時間的にも早いのだろうが、たとえ車であつても木次線沿線の道路を走りたいと思つた。

いつものように西城川沿いの国道183号線を東上、備後落合駅の手前を左折して、国道314号線を登る。周囲の田んぼは、耕運機で田起こしして黒い土が出てるのがまだ半分ぐらい。油木駅が近づくと、沿道に残る残雪の量が増えてくる。

1時間半弱で日登駅に到着。自転車置き場の前に車を停めて、持ち参する荷物を選別していたら、ホームに列車が入って来るのが見えた。日登駅9時57分発の宍道（しんじ）行き。予定は、次の11時29分発の宍道行きで、本当はもっと遅く自宅を出るつもりだったのだが、はやる気持ちを抑えることが

できず、中途半端な時間になつてしまつた。

待合室で読書。旅は待ち時間も楽しい。壁に指名手配犯のポスターが貼られている。情報提供者には高額の賞金がかけてられていて、最高は600万円。この額なら、現代版の「賞金稼ぎ」がいてもおかしくない。

車内は12人ほどの乗客。時間帯もあつて、見るからに旅行者がほとんどだ。相当に高齢な爺さんも、たぶん一人旅。自分もあの歳で旅ができるだろうか……。走る車窓を眺めていると、公園のような場所を遊んでいた子供たちが、こちらに向かって懸命に手を振つてくれた。ほんわりとした気持ちになる。

5分程で木次駅到着。その前に、長いトンネルがあつたのだが、「木次線利活用推進協議会」のホームページによると、この木次トンネル（全長223・8メートル）は、昭和2年（1927）に着工し、昭和7年に完成。「木次線のトンネルの中でも、唯一トンネル内で大きく曲がつたトンネルであり工事



「出雲風土記」にも登場する斐伊神社



三刀屋川堤防桜並木はその数約千本、距離約2キロ

しばらく歩くと痺れや痛みで歩けなくなると、休むとまた復活して歩けるようになる。この繰り返しで、目的地まで40分以上かかってしまった。斐伊神社の解説板によると、『出雲風土記』には2つの樋社（ひのやしる）が記されるが、その1つが斐伊神社に比定される。もう1つの樋社（同社座斐波夜比古神社）は八本杉のあたりにあったと考えられているが、平安時代中頃には斐伊神社

に合殿されていたと考えられている。この辺りが「樋」という郷名で「樋社」、のちに斐伊神社に改称されたようである。参道の入口に坐した狛犬の阿吽の対、拝殿の前にはお尻を上げた狛犬の対がある。日本の霊獣狛犬は唐獅子、つまりライオンをモデルにしているが、出雲の狛犬は原始の唐獅子に近い。渦巻くタテガミを持ち、お尻を上げたポーズは獲物を狙う猫科の象徴で、「出雲構え獅子」という名前があるという。古（いにしえ）の神社に参拝して、木次線の完走を祈願した。さて、帰り道だが、来た道に戻る体力も気力もない。開けた通りに出てバス停を捜したが見つからずギブアップ。スマホで地元のタクシー会社に連絡して迎えに来てもらい、そのまま日登駅まで送ってもらった。自分の車で、去年に続いて三刀屋川の堤防を再訪した。兩岸の堤防に延々と桜並木が続いている。その数約千本、距離約2キロと木次の斐伊川堤防の桜並木に負けていない。昭和33年に三刀屋町商工会によって植えられた桜で、わたしと同年。同期の桜のトンネルに囲まれて、まだまだこれからだよと呟いた。その日はそれ以上足を延ばす元気はなく、松江市内で一泊。翌日、日帰り入浴施設の「玉造温泉ゆーゆ」で汗を流した。玉湯川の沿道に植えられた桜も満開だった。

は湧水との闘いであった、かなりの難工事だったことがうかがわれる。トンネルの入口、出口両方向から工事を進めたのだが、中央部分では約15センチの誤差が生じ、手直しをして繋いだ痕が残っているようだ。現代のような精密機械のシールド工法ではなく、手作業で湾曲したトンネルを掘り進んで、その誤差が僅か15センチだったということに驚く。

木次線の名前を冠する駅だけに、相対式ホーム2面2線を有する列車交換可能な基幹駅だ。出雲神話にちなんだ駅の愛称は「八岐大蛇（やまたのおろち）」。改札で大学生らしきふたり連れが駅員に提示した切符を見て、「青春18きっぷ」の利用期間なのだと思います。3月1日〜4月10日までで、最終日が迫っている。わたしは、整理券と1900円の料金を払って、改札の外に出た。駅前には、スーパーや書店、洋品店等のショッピングセンターのビルがある。ぶらぶらしたいところだが、目的地の斐伊（ひい）川堤防の桜並木に急いだ。5分もかからない。車で来た昨年に続いての再訪である。（間に合った！）

心の中で喝采を叫んだ。満開だった。かなり強い風が吹いていたが、花弁（はなびら）は舞っていない。中国地方随一と言われる満開の桜である。平日の月曜日だが、人も多い。遊歩道の下の手（間）に合った！）

に腰かけて、斐伊川の水面を見ながら夜店のヤキソバで昼食。物足りないのので、クリ饅頭も購入。大判焼の表面が栗の形をしていて、クリ餡（あん）、サクラ餡、アズキ餡の3種類がある。欲張って全部購入、食べてしまった。桜並木を堪能した後で、商店街の中を少し歩いた。奥行き長い商店街で、閉店した店が多いが、古い看板を見て歩くだけで、往時の活気が想像できる。駅前で戻って、スマホのナビで「斐伊神社」を検索。事前にパソコンで調べたら、徒歩20分ぐらい。大丈夫か？……：杖を頼りに、スマホのナビに従って歩き始めた。坂道が辛くて何度も立ち止まる。間欠性跛行（はこう）、



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「身近な雑草のゆかいな生き方」

稲垣栄洋 著 草思社

身近な 50 種類の雑草が取り上げられている。それぞれのうんちくや物語が感動のレベル。一つ上げるならスギナ。スギナの祖先はおよそ3億年前の石炭紀に大繁栄、高さ数十メートルにもなる巨大なシダ植物が深い森を作り、それは長い年月を経て石炭になった。

何度となく絶滅の危機を乗り越えたスギナは、地下に根茎を張り巡らすことでリスク管理、地上の茎葉を取っても取ってもつぎつぎに芽を出してくる。原爆で焦土となった広島で、真っ先に緑を取り戻したのがスギナだったという。除草するには厄介だが、胞子茎であるツクシは食用にもされて愛されている。



「月なきみそらの天坊一座」

井上ひさし 著 新潮文庫

終戦直後の荒廃した時代にたくましく生きる、田舎回りの奇術師、旭日斎天坊一座の物語。一座と言っても、天坊と曲芸師くずれの内妻のお浜、押しかけ弟子の戦災孤児浩志の3人だけ。大道芸で詐欺師まがいの行為をしても、食べて行くだけで精一杯。わたしが子供の頃に見たガマの油売りを思い出した。

焼けた鉄棒を素手で掴んで法力の呪文が書かれているパンフレットを売ったり、瞬間移動装置で観客が紙に記したものを取り寄せたり、目隠して客の掲げる物を当てる透視術等々、奇術の裏側が解説されていて楽しい。その奇術をダシに使ったストーリーが巧みで、最後はほろり。



「方舟」

夕木春央 著 講談社

推理小説を最後まで読んだのは何年ぶりだろう。東日本大震災以来、殺人事件等の物語を読むことが辛くなった。読むきっかけは帯の「4冠」。推理小説の年間ランキングで、4つの媒体で1位になったという。そんなに凄い作品なの？

最初の設定で驚いた。興味本位で廃墟となった地下施設を訪れていたグループが、地震によって閉じ込められる。地下水が流入して、施設はやがて水没、そのタイムリミットまで1週間。その状況下で殺人事件が起きるのである。しかも、連続殺人。容疑者も減って行く中、最後まで犯人の気配を感じさせないの凄いは凄いな。



どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣（店内専用通貨）であれば半額、現金であれば3割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

ハロー注意報⑬

——進駐軍がいた町のはなし

ヤミ売買はスリリング 松岡初枝

昭和二十年代、世の中はまだ混乱が続いていた。食料は不足し、物資も少ない。ただ「鉄砲玉が飛んで来ないだけいいさ…」、貧しくても平穏な日々を過ごせるといふ思いだった。ラジオは「尋ね人」の放送をし、行方不明者の名前と、どこでどのよう



パーマのマシーンとお客。きれいになるのは大変!

に離ればなれになったのか「お心あたりの人はNHKまで御一報ください」という内容だった。

又、「昼の憩い」や「明るい農村」など長閑（のどか）な音楽に乗せた番組があり、昼の御飯時にほんわりしたアナウンサーの声が流れていた。

当時ジョンソン基地は正午にサイレンを鳴らしていたが、飼い猫のチョコは空襲警報の音と勘違いして、飛び起きていた。猫も「ウー」という音に反応するなんて笑えない事実である。

あらゆる品物が配給制で、足りないものは“ヤミ物資”として裏で密かに、ある意味堂々と流通していた。お上（かみ）は禁止を口にするが、喰ってゆくにはヤミ物資無しには無理というもので、お役人だって警官だって、こっそりとヤミのお世話になっていた

んだから…。

我が家の店でも、戦後間もない頃から電気パーマを始めた。戦時はコテで巻いたり“木炭パーマ”といって炭で温めたクリップ挟みを使うやり方で仕事をしたという祖母や母は、アメリカ製のマシンのを使ってパーマの施術をしたいと思いついた。早速いつもお世話になっていた問屋に注文に行ったが、当時は超がつく円安ドル高なので、アメリカの輸入品であるマシンは高額なうえに「ねえシミズさん、お米を一俵ばかり付けてくれないかね」と言われた。「農家のお客さんに何とかして貰いましょう」。商談が成立したからにはすぐに一俵の米を農家から買い、町一番の強力（ごうりき）、土建屋の頭（かしら）に浅草まで背負って行ってもらうことになった。東京は特にヤミ米などの取り締りが厳しいということもあって、大きな風呂敷に二重に包んで行った。

上野に着くと案の定、警官の笛が鳴った。「おい！ その二人待ちなさい！」「あら、何でしょう？」「この風呂敷の中は米だろう！」「いえ、病人用の布団ですよ」。警官は包みを叩いて「ホラ、米俵じゃないか！」「すみません…。でもこれは病人用です。

空襲でやられて寝ついた親類の人達の命の米です。どうか通してくださいな」「イヤ、そうはいかない」「あら、おまわりさん、見ればいい体格してるじゃないか。あんたは一切ヤミ米喰ってないんですか？ ヤミなしには生きられないから。どこかの判事さんはヤミ米喰わずに死んだらしいよ」「何を言うか！」「どうか病人の為にお願いします。それとも親類の病人が死んだらどう責任持ってくれるんですか！」「ああもう…布団だろ、いいから早く行け！」。二人はニッコリ笑って足早に地下鉄に乗った。浅草で代金と米を渡してマシンの受け取り、帰りは重いマシンの頭が背負った。問屋のおかみさんは「米は大切に食べますよ。これは舟和（ふなわ）のイモ羊羹（ようかん）だから、お土産にどうぞ」と持たせてくれた。

やっとの思いで家に帰り着いた二人は、疲れと安心でへたり込んだ。「ご苦労様でした頭。これは今日の手間賃、羊羹は奥さんに持って行ってネ」「ありがとうございます。それにしてもシミズの先生の度胸にはびっくりしたよ。嘘も方便でなもんだねえ」「あら、頭だってニッコリ笑ったよ。女は度胸、男は愛嬌さ！」

こんなドタバタ劇の末に買った電



米俵を背負ってパーマのマシンを買いに浅草へ



“洋モク”は貴重で愛煙家に大人気!

売れたらしい。そこでおばちゃんの度胸の良さが発揮された。「煙草をほしがる人が多いからPXで買って来てくれないませんか？」多くの将兵達に同じ事を頼んで、その煙草をヤミで売っていた。「トントン、トントン」が合図でさ、裏口を叩く人に売るのでよ。もちろん店じまいした夜にね!「洋モクはいい臭いだからな」。売るほうも買うほうもスリル満点で、警官に見つかったら大変、でもそんなヤミ煙草がけっこう町内(まちなか)で吸われていた。



気パーママシンは、祖父と父が組み立てた。薬品や小物も揃えて次の週から早速パーマのお客が大勢来店するようになった。連日の忙しさに店のおネエさん達もクタクタになったが、その分お給料が少し上がって嬉しそうだった。「ヤミが悪いとは言うけど、方便と思うよなあ。」祖父も父も日曜には“カミテイ”の本領を発揮して、夕食の支度をしてくれた。

近所の和菓子屋のおじさんは「砂糖が無くちや商売になんねえんでね、基地勤めの人に頼んで、中のPXか

ら流して貰ってんだよ。小豆だって農家からのヤミさ」。食堂のおばさんも「米やら砂糖、醤油、油、ヤミが悪いって言ったら喰ってゆけないのさ」。誰が悪いというよりも、あの時代の混乱とドタバタ劇があつちこつちでくりひろげられていたのだ。埼玉の地で、しかも農家が近くにある町ではイモや野菜やら、いろいろな食品を買えた。お客にお裾分けしたりして皆で何とか食べてゆけた。いろいろな事があつても、それぞれが「何とかなるさ、明日もお天道様が昇るんだからね」。逞しい人々の笑

顔が輝いていた。もうひとり超のつく逞しさで世渡りしていたおばさんがいた。あの“ブラジャー”を作って売りまくった化粧品屋のおばちゃんだ。おばちゃんは小柄で細身の美人、一年中着物姿で接客していた。基地の将校の人気者で、「プリーズ・ユア・ハズバンド!」とラッキーストライクやキャメルといった煙草をプレゼントされたり、転任や帰国が決まった将兵達が沢山の日本土産を買った。のれん、手拭い、富士山や桜の刺繍が美しい“スタジャン”などがよく

いろいろな出来事は私がまだ小さい頃の話ばかりだが、米に關しては臨海、林間学校や修学旅行などへ行く時に、一人当たり一日二合の米を持って行った。米穀通帳が一戸一戸渡されていて、その通帳を持って米を買いにゆく。だから旅行客を泊める宿は、米だけは客に持参してもらっていた。私が専門学校を終了して北海道の地に仕事で生活した二十歳の時に、役所にこの通帳の写しを持って行った覚えがあるので、かなりの間“食管法”が存在していた。

今思うと、昭和二十年〜三十年代の世の中は、現代では想像もできないような事ばかりだった。私の親達、祖父母達の喰うための努力は、涙ぐましくもあり滑稽でもあったのだ。遠い昔の出来事と言ってしまうと、それまでだが、皆一人ひとりが毎日真剣に生きていたと思う。「つべこべ言わずに頑張れば、何とかなるものさ」という人々があつたからこそ今があるんだなあと思うのだ。

「本を買ってもらえませんか？」

四十代半ばの瓜実顔（うりざねがお）の美人、旅行者だろうか。

「一冊だけですか？」

彼女が頷いた。未整理の本がバツクヤードに溢れて生活スペースまで浸食。今は買取りも引取りも休止しているが、店頭に持ち込まれた少量の本は対応するようにしている。

タイトルは「雑草たちの物語」、雑草に「あらくさ」のルビが振つてある。副題が「憎まれっ子世に憚る」。オオイヌノフグリのイラストが背景に使われている。ボタニカルアートだろうか。繊細な描写でコバルトブルーの花が美しい。

（自費出版だな）

裏表紙のカバーに、図書コードと価格の表示がなかった。奥付を見る。出版は三年前だ。著者である村重佑三さんのプロフィールの小さな白黒写真を見て、思わず彼女の顔をチラ見してしまう。

「父です。二年程前に他界しました」

「石川から来られたんですか？」

村重さんは石川県内の小学校の教師を歴任している。印刷所も金沢市だ。

「父が住んでいた実家が石川なんです。わたしは東京から……」

どうしてうちなんか？ と声が

出かかったが、査定の方が先である。四六判のハードカバーでまだ真新しい。お金をかけて丁寧な仕上げた本だということはすぐにわかった。絵も村重さんが描いている。

承諾を得て、ネットで調べることにした。三件、ヒットした。「日本の古本屋」が二件、「メルカリ」が一件。いずれも五千円以上の値段がついて

雑草たちの物語

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子 ⑩

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

いて、一番高いものだと八千五百円で売られている。

「いい値がついてますね」

「父と親しかった教育評論家の方が、最近になって新聞の書評欄で紹介してくれたんです。一般には売られていない本ですから、値段が上がってしまったようですね」

「いくらぐらいを希望ですか？」

率直に尋ねた。売値と買値の区別、

いや落差を知らない客は多い。

「買値はいくらでもいいんです。ただし、ネットでは売らないでほしい。値段も安くして、植物好きのお子さんに売っていただけたら、父が喜びます」

意外な要望に驚いた。

村重さんは、自分の本を全国の図書館に寄贈することを考えていたという。しかし、自費出版した本を引

……、村重さんは病床で夢を熱く語ったという。

「親孝行らしいことは何もできませんでした。母親が亡くなってからはずっと独り暮らしで、不自由しているはずなのにほとんど実家には帰らなくて……。わたし、父が嫌いだったんです。学校のことばかり優先して、父は自分の子供よりも生徒の方が大切なのだと僻んでいました」

（同行二人）、お父さんと一緒に旅をしているんだな）

売値が千円、買取値が五百円とさせてもらった。子供だと少しハードルが高いが、それだけ本を大切にしているかと思っただ。

五百円で彼女が買ったのは、小川糸「ライオンのおやつ」の単行本と原田マハ「楽園のカンヴァス」の文庫本。なかなかのセンスだ。彼女も本好きなのだろう。

「おっ、でっかい犬のキンタマだ！」

山本文吾さんが大きな声で言った。うちの常連……、本を買うことは滅多にないのだが。

「下品ですね。オオイヌノフグリのイギリスでなんて呼ばれているか知ってますか？」

『キャッツ・アイ（猫のひとみ）』

日本でも『星のひとみ』と呼ぶ場所がある」

さすがの博識だ。かくも花は清楚で美しいが、実が犬のふぐり（鞞丸）に似ているのでこんな和名がついた。

「学名がペロニカというの？」

「あのキリストの？」

重い十字架を背負って刑場に向かうキリストの顔の汗を、ハンカチで拭いてあげた女性がペロニカ。そのハンカチに、キリストの顔が浮かび上がるという奇跡が起きた。「オオイヌノフグリの花をよく見ると、キリストらしき人の顔が浮か



び上がってくるのだそうです」

「おれは仏教徒だからな」

不機嫌そうに呟いた。

「四葉のクローバーはどうしてできるのか知っていますか？」

幸せの四葉——。聖パトリックがシロツメグサ（クローバー）の三葉を愛・希望・信仰の三位一体にたとえ、四枚目を幸福と説いたこと由来する。

「バグによる奇形だな」

文吾さんが答えて、ポケットから缶コーヒーを取り出した。

「葉の生長点が傷つけられるのが原因の一つだそうです。だから、道端や運動場など、よく踏まれるところで見つかりやすい。幸せには試練が必要なんですよ」

踏まれても踏まれても、逞しく育ってほしいという子供たちへのメッセージが込められている。

『『プスの恋』と呼ばれている雑草があるんですが、知っていますか？』

しばらく考えた。

「ヘクソカズラ……」

自信はなさそうだ。害虫から身を守る悪臭から、「屁糞かずら」と呼ばれている。白と薄ピンクの清楚な花を咲かせるので「早乙女花」の別名もある。

「オオバコです。踏まれてもいいように頑丈で柔軟な葉を持っていて、他の植物が育たないような環境で生存できる。そして、オオバコの種子にはゼリー状の物質があつて、水に濡れると膨張して粘着する。靴や動物に踏まれると、くっついて運ばれて行って繁殖する。醜女（しこめ）の深情怀のように、種子がしつこくまとわりついて離れない。だから『プスの恋』と言われているんです」

文吾さんがクンクンと鼻を鳴らした。

「その本、なんだか女と金のおいがるな」

わたしが持っている本を見て、ニヤリと笑った。

「もう予約済みです」

嘘も方便、文吾さんの手に渡ると、すぐにネットで転売されてしまう。もうしばらく自分の手元で愛でたいと願った。絵や文字を体感することのできる紙の本の魅力は別格で、利便性の高いデジタルと共存できると信じている。

《参考文献》

「身近な雑草のゆかいな生き方」稲垣栄洋著（草思社）

まちの古本屋さん どろ書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。
 - ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
 - 定休日：毎週日・月・火曜日（5月より日曜日も休みます）
 - TEL: 090(9913)3052
 - 営業時間 9:30～18:30（昼食休憩 12:00～12:30）
- ※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

第四部 祭事を見る

七月九日 清水寺千日詣

清水寺は京都市東山区清水にある北法相宗（きたほうそうしゅう）の本山。延暦十七（七九八）年、坂上田村麻呂の創建とされる。「清水の舞台」と呼ばれる、懸崖造の本堂の掛出（かけだし）は有名である。



清水寺では、旧暦七月十日には塔頭（たっちゅう）寺院が輪番で、死者や先祖のために経木塔婆を上げさせて、これをまとめて五条の橋から鴨川に流していた。これが「欲日」（功德日）であって、死者の滅罪のためである。今も、六道珍皇寺（りくどうちんのうじ）で経木塔婆を書いてもらうとこれを水向地藏にあげたり、焼いたりするのも、この「千日詣」の信仰が残っているからとされている。

「千日詣」とは、神社・仏閣に千日間参詣・祈願すること。江戸時代、特定社寺に特定日（一般に旧暦の七月十日）に参詣することで、千日間参詣したのと同等の御利益があるとされ行なわれていた。

七月十五日 孟蘭盆会

孟蘭盆とは、中国で成立した盂蘭盆経をもとにしたものである。インドから中国を経て、飛鳥時代に日本へ入ってきた。推古天皇十四（六〇六）年、飛鳥の法興寺で行なわれたのが

初めて、聖武天皇天平五（七三三）年から宮中で仏事となった。

そして、旧暦七月十五日を中心に行なわれる先祖の霊を祀る仏事で、俗に「お盆」「盆」とも言う。関東では七月十五日に行なうことが多く、関西など西日本では月遅れの八月十五日に行なう所が多い。

盆の行事は正月の行事と同様、祖霊祭の意味を持ち重要なものである。盆の期日は、室町時代は十四日から十六日、江戸時代は十三日から十五日になった。広く一般に普及して行ったのは近世になってからである。

盆の代表的な行事には迎え火・送り火・盆踊りなどがある。盆の十三日には先祖代々の墓参り、夕方には門口で「迎え火」を焚き、精霊を迎え入れる。十四、十五日には僧侶に来てもらって「お経」を上げてもらう。十五日の夜は「送り火」を焚き、精霊を送る。盆踊りは年に一度、盆に招かれて戻ってくる精霊を迎え、慰め送るための踊りである。十四日から十七日にかけて、お寺の境内や町の広場、海岸の砂浜で行なわれる。

七月十六日 五山の送り火

京都の夏の夜に浮かび上がる大の文字、「大文字焼き」ではなく、正確には「五山の送り火」と呼ぶ。「五山

の送り火」とは、お盆に行なわれる京都の伝統行事で、京都を囲む五つの山にそれぞれ「大文字」「妙・法」「船形」「佐大文字」「鳥居形」の形に火を灯す。五つの山に五種類の送り火を焚くところから「五山の送り火」と呼ばれるようになった。

その起源は諸説あるが、平安時代とも室町時代ともいわれ、長い間、京の町の人々に親しまれている。この五山の送り火は、お盆の先祖供養の一般信仰「孟蘭盆会」と結びついて、お盆に帰って来た先祖の魂（精霊）「おしよらいさん」を各家で供養した後、再びあの世に送り出すという意味がある。

七月二十四日 地藏盆

一月二十四日を「初地藏」、七月二十四日を「地藏盆」と呼ぶ。地藏菩薩の功德を講讃する法会である。地藏菩薩は、釈迦仏の委託を受けて、その人滅後、弥勒菩薩の出世までの間（無仏の期間）、釈迦に代わって六道の一切衆生の苦を除き福徳を与えたいいわれ、特に地獄の衆生を化導（済度）し、替りに苦しみを受ける菩薩とされている。俗説に地藏は子供の成長を守り、その死後、賽の河原で苦難を救うと伝えられ、子供の守護仏として信仰されている。

ヨーロッパ23日間「卒業旅行」(八)

マック☆ヤマザキ

2月25日日曜日、ハイデルベルグ
→ローテンブルグ→ミュンヘン。

朝食のレストランを下見して驚いた！ コーヒー、紅茶、ミルク、フルーツ、ハム、チーズ、卵料理、など一杯盛り合わせてあった。我々が今までに食べていた質素なコンチネンタル・ブレックファースト（固いパン、コーヒー又は紅茶のみ）が見当たら



ないので従業員に尋ねたら、「全員ここで召し上がっていただきます」。もう一度「ここで本当に食べてよいのか？」としつこく再確認した。

足早やに部屋に戻り、学生たちにモーニング・コールを兼ね、豪華な朝食であることを付け加えた。初めは眠そうな声で電話に出て来た学生が、久しくお目に（いや“お口に”）かかっている朝食メニューの報せにやっと目を覚まして、ダッシュよろしく食堂に駆け込んで来た。

出発前のホテルの前庭で、一台の車の周りを数人が取り囲んでいた。車に興味を持っている私は、旧東ドイツ製の国民車「トラバント」であると判断した（写真参照、ウィキペディアより転載）。白い煙を吐いて「タバタ」と後ずさりするような走り方をする車には様々のステッカーが貼られ、なかなかの人気振りだ。学生たちの中には、ボディは段ボールで出来ているとの噂を確認するため、こぶしで叩く者もいた。4人乗り、

空冷式エンジン、600ccとのこと。

前年の1989年11月9日に起きたベルリンの壁崩壊という歴史的事件のことを思い起こした。ベルリンの壁は、かつてのソ連と米国が対立していた東西冷戦時代に、ベルリン市街を分断していた壁のことで、1961年8月、旧東ドイツ政府が国民の西側への流出を防ぐ目的で作った。高さ3メートルで総延長は155キロに及んでいた。

私は偶然にもベルリンの壁が崩壊した日に、関西の商社の人たちの添乗員として、旧西ドイツのステュットガルトで商談の真最中だった。壁が壊されたという“臨時ニュース”に接し、商談を一時中断したことを覚えてい

る。我々はまた、運転手兼ガイド（外国ではこれが普通）のフレディーのバスで9時にホテルを出発した。卵料理のある朝食に巡り合えてバスの中には温かい雰囲気漂っているように思えた。10時ごろディンケルスビュールという町に着いた。

この町は人口1万人足らずの心休まる美しい中世の都市で、とある伝説がある。町を取り囲んだスエーデンの軍隊が、抵抗できない市民に町の破壊を告げる。そのことを知った

何人かの子供たちが、小さな身を馬の前に投げ出して慈悲を乞うたのであった。兵士たちが破壊を始めようとしたとき、一人の少年の面影にわが子を見た将軍が、子供たちの真心に打たれて、そのまま何もせず去って行った。

この子供が町を救った故事から「キングダーツェヒ」という「子供祭」が毎年7月に行われているそうだ。

約1時間のドライブでローテンブルグに着いた。この町は「中世の宝石」と言われ、ロマンチック街道のハイライトである。ドイツでは、中世の極めて美しい姿をそのまま今日に伝えている唯一の町と言われている。

町並みは城壁で囲まれていて、その中に人口13000人余りが生活し、中世の建物がそのまま残っている。町角を歩けば、まるで“タイムマシン”に乗って来たかのような錯覚をおこすほどであった。

城壁のほとんどが屋根付きの遊歩道となっており、人が二人並んで通れるような広さがあった。出発までの時間を利用して速足でジョギングしたら一周、20分くらいかかった。屋根があるので、ジョギングするにはもってこいのコースではないかと思えた。

どろくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

燕の子並びて朝日迎へけり

近藤 昌平

田の神と言われし大樹と古社

富久光

暖かや番犬の居て鍵かけず

片岡 正人

さくらさく今日から議員一年生

隆愚

落葉松の芽吹初めたる奥出雲

大槇 三代子

鳩三羽首の動きの春の暮

寺内 龍二

青春のきつぷ手に八十歳の旅人よ

赤川 冬人

梅散りてことしの実り待つあはひ

松岡 初枝

名残りの梅漬けしっとり香る

投稿&寄稿

候のことば

「小満」

隆愚

暦の二十四節気で、五月二十一日から六月四日を小満といひます。万物が次第に成長し、天地に満ち始めるという意味です。江戸時代の歳

時記「改正月令博物笈」には、「小満の日を麦生日といふ。晴天なれば麦大いに熟す」と記されています。普通「麦生（むぎふ）」といえ、麦が生けているという意味ですが、ここでは、穂がふくらんでいよいよ収穫の時が近づいてきたということでしょう。麦だけでなく、天候に恵まれて、草木には一段と精気がみな

ぎってきます。

もともと、「緑」という言葉は色名ではなく、みずみずしい新芽をさす言葉でした。その緑も、萌え出た頃の萌黄色や、若草色、若苗色から、若葉色、若緑色、苗色、そして、深緑色へと、野山に緑色のグラデーションを描いていきます。新緑から万緑へと移り変わっていく季節と言えるでしょう。この頃吹いてくる少し強い南風を「青嵐」とよびます。風まで青葉の色を映しているわけですね。

雨も、この時期に降る雨は、「翠雨」「緑雨」「青雨」などと呼ばれます。濡れればいっそう青みを増す緑たち。若葉や若草を、鮮やかな色に塗り替えていく雨もまた、緑色に色づいて見える季節です。

「AIのこと」

赤川仁洋

ノートパソコン用のスピーカーを買った。今まではイヤホンで聞いていたが、音楽はステレオで聴きたいし、どうせならお気に入りの楽曲を店内に流してみたい。

ネットで情報を集めて、小さな球形のスピーカーセットを一万円弱で購入、さっそくセットアップした。

近距離無線通信のブルートゥースが使えるので、有線で繋がなくてもいいのありがたい。

さっそくチューブの音楽系の動画を検索して、新しいスピーカーを試してみた。近くでスピーカーが鳴るので、なかなかの迫力だ。ある動画の女性のジャズボーカルの声が心に響いた。ささやくようなハスキーな声で、語りかけるような歌声だ。誰だろう？ 懐かしいメロディラインだが、曲目もわからない。調べて驚いた。AI（人工知能）で合成した声、曲なのである。雑音がないので音声も蒸留水のようにクリア。名曲の良いとこ取りで、心地良いはずである。AIには興味がなく、関わることもないと思っていたが、そういう世の中なのだ実感。



どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

2025 手仕事の仲間たち作品展

- ふーさんの人形 (猪野芙佐恵)
- 多肉植物 寄せ植え (生駒洋子)
- 帽子・ガラス (ギャラリー創美)
- 和小物・木工細工 (梅村輝司)
- 羊毛フェルト (くららおばさん)
- アクセサリー (yutsuko)
- 着物リメイク・和小物 (琴)
- 和雑貨・和小物 (我楽)
- 布小物・ポーチ (あかゆみ)
- 古布・着物・陶器 (お福)
- 毛糸クッション・ポーチ (あさつゆ)
- 着物リメイク・布小物 (ちくちくはうす玉手箱)

場所：庄原ショッピングセンター「ジョイフル」2階
(TEL0824-72-4111)

日時：5月23日(金)・24日(土) 10時～16時
(最終日は15時終了)

主催：ちくちくはうす玉手箱

くらし見つける縁側店 一里のアトリエのんきのオープンハウス

みんなのいごちのいい”縁側”を探しに来ませんか？

のんきの木あそび・絵画、森で遊 you 作品展示、友人知人の張り子人形・刺繍作品展も同時開催。

- 黒田原自然お散歩ツアー (ガイド案内有)
- 野原 de 手織り体験しませんか？
- ミニコンサート (各日 13時より)

飛び入り歓迎！

日時：5月17日(土)～19日(月) 10時から16時

場所：手しごと広場のんき (庄原市川北町 3268-2)

「ぐんぐん伸びよう会」

(教室：庄原市川西町 241 連絡先：080-3631-9125 やないたえこ)

幼児教育の必要性についての Q & A

Q: 「語りかけ」が大切だと聞きましたが、どういう点を注意すべきですか？

A: 単にものの名前を教えるだけでなく、お母さんが感じたこと、今日の前にある物、起きたこと等すべてを、言葉に出して話してあげましょう。例えば「まっかでおもしろくないちごね」「あー、おいしかった」「空がくもってきたわ、雨が降るのかしら」「きれいなお花、とってもいいにおい」など。

無料体験学習受付中！！ お気軽に問い合わせてくださいね。対象者：0歳～小学6年生



編集後記

◇木次の斐伊川堤防の桜は満開で幸運でした。同じ雲南市の大東町には、「赤川」沿いに河津桜の並木があるそうです。2月下旬には咲き始めるので、来年は写真を撮りに行きたいですね。

◇倉田百三の漫画を描いた岩崎健二さんの連絡先を探しています。ご協力をお願いします。

◇毎月最終日曜日に、どら書房で将棋を指しています。興味のある方は赤川まで連絡を。

◇どら書房は5月から週休3日、日・月・火曜日が定休日になりますのでよろしくお願いたします。無理はしないで、週休4日にならないように頑張ります(苦笑)

発行：どら書房

〒727-0012

庄原市中本町 2-1-10

☎090(9913)3052 (赤川)

e-mail: touzin@nifty.com

誌面デザイン: ROUTE183

協賛: 九日市愛好会

第283回

くんちいち

ひょうばあ九日市

毎月九日に開催されている街角市場です。発祥は天正年間（1573～1591）、織田信長が安土城を築いたり、豊臣秀吉が大阪城を築いたころ、物々交換の市（いち）として始まりました。その歴史ある市が2001年に復活、地元の出店はもちろん、近隣他県からの出店＆名産品で賑わっています。



5月9日(金)

9:00～13:00

TOPICS(開催場所は裏面の地図参照)

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
5月8日(木)～10日(土) 10時～15時
「ちぎり絵作品展」

★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き

★カフェクラウド タピオカドリンク 100円引き

★どら書房、休憩室(漫画ルーム)あります! 無料です。

★「2025・手仕事の仲間たち作品展」日時:5月23日(金)～24日(土) 10時～16時
場所:庄原ショッピングセンター「ジョイフル」2階
※九日市の店舗も多数参加! 主催:ちくちくはうす玉手箱

★あなたも自分のお店を出してみませんか?(出店者募集中!)

*出店申込みは、【毎月20日締切】 コンパネ1枚スペース1,200円～
九日市愛好会事務局 TEL/FAX(0824)72-8285
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10(楽笑座内)

【ホームページ】
<http://www.kunchi-ichi.jp>

